

小学生を対象とした 当院の東日本大震災災害救護に関する出張授業の経験

高橋敬明¹⁾ 山田忠則²⁾ 竹内健夫¹⁾ 伊佐治真子¹⁾

要旨：赤十字医療社会事業活動は地域の皆様に医療・保健・福祉の総合的サービスの提供と、赤十字の活動を推進する為活動している。その中で当院での対象の多くは高校生から大人であったが、今回小学6年生を対象に小学校の授業の一環として、災害についての講話を東日本大震災で災害救護活動に携わった職員が小学校に出向き特別授業を実施した。授業内容は、担当教諭の要望と児童に事前アンケートを行い、その要望に応える形で、「地域で起きた災害（地震・水害等）」「今後起こり得る災害への心得・来たる東南海地震等への備え」「東日本大地震での当院災害救護活動活動や知見」等を行った。今回の出張授業後、事後アンケートを行い「参加した全ての児童が役に立った」との意見で、学校側からも「毎年お願いしたい」と言っただき、小学校6年生（12歳頃）から聞くことが、将来の災害の備えとして教育に非常に良いと思われ、震災の記憶が風化していくといわれる中で、こうした機会を持つことが出来、様々な意味で貴重な経験をしたので報告する。

【はじめに】

医療社会事業活動は地域の皆様に、医療・保健・福祉の総合的なサービスの提供と、赤十字の活動である。講習普及事業・災害救護等を推進していく為活動している。当院での対象の多くは高校生から大人であった。

今回、我々は小学校の授業の一環として、当院で行った東日本大震災での災害救護活動や、来たる災害に向けて整備している病院設備や災害備蓄状況等を紹介する機会を得たので報告する。

【内 容】

講話依頼があったのが、近隣の岐阜市立長良西小学校生徒数759名（25学級）、教員数35名、1955年（昭和30年）の創立の小学校である。この小学校では、6年生を対象に週一回の総合学習を実施している。その総合学習の中には防災

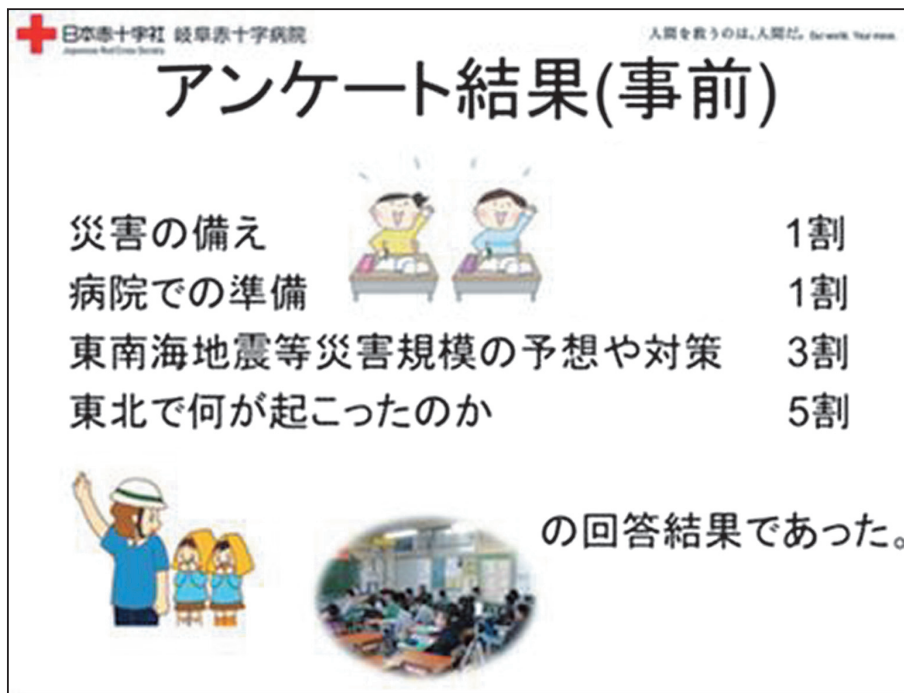
コース・福祉コース・環境コース・地域交流コースの4種類のコースが設置されている。児童たちは自分の関心と興味に応じてコースを選択し、それぞれの学習を進めている。そのうち防災コースでは、地域で起きた地震、水害等の自然災害や今後起こるといわれる災害の内容や自分たちでできる備え・心得等を学習している。そうした中で学校側には、実際に現場へ出動した人の話を子供たちに「聞かせたい」という考えがあり、東日本大震災での当院が行った救護活動の実際や知見、来たる東南海地震等への備えについて講話の依頼があった。

当院からは、東日本大震災において救護活動に携わった職員と病院防災担当者が小学校に出向き、90分間の時間を頂き、特別授業を行うことになった。事前に学校側、防災コースの担当教諭の要望と児童たちに行ったアンケートで防災について、「知りたいこと」「学習したいこと」を聞き、その内容に基づいて授業内容を考えることにした。担当教諭からは震災の現場の様子について話してほしいと要望された。また児童たちに行ったアンケートの回答は、「地震が起

1) 岐阜赤十字病院 医療社会事業部

2) 岐阜赤十字病院 麻酔科

図1 事前アンケート結果



きた時や災害の時に対する病院の設備や、被災地に行ったときの事が知りたい。」「東日本大震災でどれだけの人が救助に向かったか。」など、約3割の児童が東南海地震等災害規模の予想やその対策を、約7割の児童が東日本大震災で東北に何が起こりどうなったのか、を知りたいと回答していた。こうした結果を踏まえ、要望に応える形で内容を構成し、授業に臨んだ。(図1)

授業は2部構成とし、前半は「東南海地震の被害予想と当院の設備備蓄の状況」と「一般的な災害対策について」をテーマとし、地震のメカニズムや近い将来起こると言われている東南海地震と、岐阜市において想定される被害予想を簡単に解説し、当院の災害に対する設備の現状と家庭で実行可能な備えについて話をした。また、東日本大震災の概略にも触れた。後半は東日本大震災において、当院救護班が岩手県陸前高田市、宮城県石巻市で行った活動や町の様子を紹介した。陸前高田市での活動は震災直後の事を、宮城県石巻市での活動は震災から約1か月の事をまとめ、これらに対比させて話をした。また東日本大震災の両市の震災前・震災後を写真で紹介し、震災被害の大きさを感じてもらい、さらに活動当時の周辺の状況や出来事を、できるだけ写真を交えて話をした。聞いている

子供たちの表情は真剣そのものであり、目を輝かせながら聴き入っていた。(図2)

授業終了後に、今後の参考にしたいと考え、児童や担当教諭に授業後アンケートをお願いし、後日回収をした。アンケートでは「授業の感想」や「今後起こり得る災害についての自分の考えや思い」を書いてもらった。そのアンケートの回答として、「今回の授業を聞いて実際に地震が起きた際などに役立てていきたいと思った。」「東日本大震災

の怖さを改めて知ることができ、家族にもたくさん話をした。」等の意見が多かった。そして、授業に参加した全ての児童が今回の授業を聞いて、役に立った、今後に生かしていきたいと意見をもらった。(図3) また担当教諭からは、「こうしたことを子供たちに伝えていくことが私たちの役目だと思う」との回答を頂き、学校長からは、「今後は毎年でもお願いしたい」と言っていた。

【考 察】

当院における医療社会事業は、その対象のほとんどが大人である。実際、当院の東日本大震災に対する一般への活動報告は、大人を対象としたものとホームページ上のもののみであった。本来病院は傷病者に対する診療が中心なため、健康な年少者を対象に今回のような形態の講話は行いにくい面は否めない。しかし、以前から行ってきた災害に対する当院の活動を今以上に広く広報することも医療社会事業部の立派な活動と考えられる。そうした意味で今回の出張授業は病院としてもユニークな活動であると思われる。一緒に特別授業を行った医師は、「当院の救護班として赴いた石巻赤十字病院で、全国

図2 授業風景




から参集した災害救護班を指揮された石井正先生から、「バンバン写真も撮って、岐阜に帰ったらできるだけ多くの人に見せてあげて」と言われた言葉が忘れられず、その言葉に答えていない自分に内心忸怩たる思いもあった。また、長良西小学校は私の母校でもある。後輩たちに震災時の活動を知ってもらえた今回の授業は、その石井先生の言葉に少しは応えることができたのではないかとも思われたこともあり、大変

うれしく感じた。」と話された。

今回の授業を行って感じた反省点と感想は、内容構成と進行の仕方が拙かった、という点と、授業に対する児童の姿勢が素晴らしかったということである。我々が気負ってしまった点もあり、情報を盛り込みすぎたことや時間的な余裕を持って進められなかったことは悔いの残るところである。確かに小学生相手の話は慣れておらず、どの程度リアルに話してよいのか、とい

図3 事後アンケート結果



日本赤十字社 岐阜赤十字病院
Japanese Red Cross Society


人間を救うのは、人間だ。 For each other.

アンケート結果(事後)

講話後、アンケートを行い、後日回収した。

- ・大変役に立った。
- ・どんな物を用意すべきかわかった。
- ・現地ではひどいことになっていてびっくりした。
- ・災害が起きた時の為に家族と話し合うことが必要だと思った。

参加した全ての生徒が役に立ったとの意見であり、校長先生からも今後も継続したいと言葉をもらった。



うとまどいもあったが、どうすればこれがより迫力をもって伝えられるかの工夫は足りなかった。それでも、授業中の彼らの態度やアンケートに寄せられた意見は真剣そのもので、逆に我々が救われた感もあった。ただ、見せることができたものは写真であって、本当の現場はもっと迫力があるのだということは何れだけ伝えられただろうか。

近年、全国の赤十字の支部、病院で、このような災害に対する講話の依頼が多く寄せられることから、赤十字本社事業局の救護・福祉部では、防災教育事業プログラム検討委員会を立ち上げ、統一した防災教育を可能にするべく新たな取り組みを推進している。他方で、日本赤十字社の、小中高生を対象とした青少年ボランティア活動（JRC）は、岐阜県では未だ限定的なこともあり、今回のような機会に我々も恵まれることはなかった。また、小学校側からすると、病院へ講話依頼を行うことは敷居が高いと考えておられたように感じた。警察や消防署といった公的機関は我々が幼少のころからすでに学校教育に協力し、多くの社会活動を行ってきた。現状では病院の診療とそれに付随する本来の活動で精一杯な面もあるが、病院の中のみでなく、今後は医療社会事業の一部としてそこに

関与することを考えてもよいと思われる。そのためには、地域の学校との関係を密にすることが今後の課題と考えられる。それは、単に学校にJRCを広めるきっかけのみならず、防災意識を広めるきっかけや学校における防災教育の一助になればと考える。

赤十字の使命は「人道の実践」で、その一つとして講習普及活動等を院内でも積極的に進めている。その中で一般成人ではなく小学生を対象にした研修・講話は大変有意義であった。対象を

を広げきれていない中ではあるが、小学生に単に知識と技術を習得してもらうだけでなく、防災に対する知識を普及することは、家族や地域を減災に導く第一歩ともなるであろう。それはまさしく人を大事にするという赤十字の使命である「人道の実践」の活動に繋がるとも考えられる。

【結 語】

小学校教育の中でも災害の授業が強調され始めた今、地域で果たす赤十字の役割は多くあると考える。小学生対象に講話することは初めての機会であり、反省点も感じられた一方で、今回児童らの意見を聞き、同年齢の子を持つ親としても、今回の授業を12歳頃から聞いていくことは、むしろ安全・防災意識の育成を図る上で、将来の災害への備えとしての教育に非常に良いことと思われた。

震災の記憶が風化していくといわれる中で、こうした機会を持つことが出来、様々な意味で貴重であった。

今回の出張授業が、今後の防災教育の一助になれば良いと考える。

本稿の要旨は第50回日本赤十字社医学会総会（熊本）で発表した。